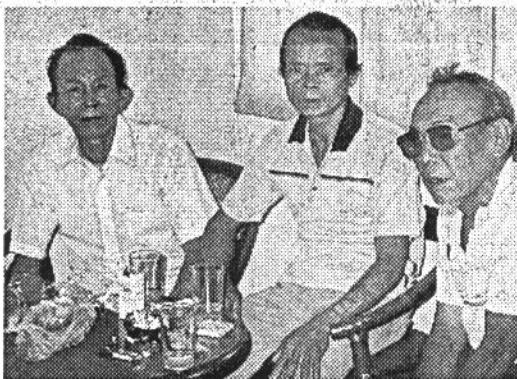


少数民族の集落ト  
ダヤ地区。約二  
百世帯のバゴボ  
族にまじって、  
タカモリ・アキ  
ラさん(五歳)、ヨ  
シタカラさん(三)  
の兄弟 小田ケ  
イジさん(六)ら  
混血一世の五家庭  
現地を訪ねよる  
府軍と新人民軍な  
る危険地帯。電報  
つて、市内の学校  
息子が連絡役を務  
三人はけものの道を  
一を乗り越いで、  
やつてきた。

## アボ山の麓で

陸で避難の途中、母子と離れ離れになり、収容所から日本に引き揚げた。小田さんの父は、船が到着した鹿児島から一度、手紙を寄こした後、音信はなく、十六、七年前、「知人から死」と連絡が入った。父の出身地は小田さんが「広島、タカモリ兄弟は「広島・とかえるん」とだけ覚えている。

残された二組の母子は逃げ回った末、トドヤ地区に住みついた。三人はバゴボ族の娘と結婚し、小田さんは十四人、アガラさんは八人、ヨシタカさんは六人で、いずれも日本人。米軍上級士官の夫や娘の夫など、南ダバオ州トレラン地区に内村みよさん(夫)の一家が住んでいた。すぐわきを大きな川が流れれる辺のニッパハウス。電気は通わず、家具らしい家具もない。セブ族の夫夫との間に生まれた子が生まれ、五人は純化するため、歯を黒く染めたところに入り、ヨシタカさんの左手エロコシ、バナナにイモ類。シカやサル、トカゲは貴重ななんばく源だ。政府軍とゲリラが交戦にやってきて、家を荒らし回るのが悩みのタネだという。さらに爺(ふもと)を下つた南ダバオ州トレラン地区に内村みよさん(夫)の一家が住んでいた。すぐわきを大きな川が流れれる辺のニッパハウス。電気は通わず、家具らしい家具もない。セブ族の夫夫との間に生まれた子が生まれ、五人は純化するため、歯を黒く染めたところに入り、ヨシタカさんの左手エロコシ、バナナにイモ類。シカやサル、トカゲは貴重ななんばく源だ。政府軍とゲリラが交戦にやってきて、家を荒らし回のが



アボ山のふもとに住むタカモリ・アキラさん（左）、弟のヨシタカさん（中）、小田ケイジさん（右）は1日がかりでやってきた。=ミンダナオ島ダバオ市で

## 少数民族に同化父思う

陸で避難の途半、母子と離れ離れになり、収容所から日本に引き揚げた。小田さんの父は、船が到着した鹿児島から一度、手紙を寄こした後、音信はなく、十六、七年前、知人から死し連絡が入った。この出来事は小田さんが最も印象深いものだ。

ミンダナオ島ダバオ市の西に、フィリピンの最高峰アボ山

タカモリ兄弟の父は獣師、小田さんの父はマニラ麻の栽培農

人の子たくさん。

# 志士之遺稿

## 比国ミンダナオ島

4

立で、一家八人が暮らしていく。社関係者から「父みづかる」の「羽をつぶし、父に分けてもらはれなくなる」帰ら際、みよ連絡があった。父と兄の写真も、つた形見の皿に、心づくしの料理を盛った。料理は「一品だが、さんばんたくさんあります」となどなどしい日本語であいさつ栽培する大田興業会社に勤め、岸に住む、日本語のわかる混血、常食のトウモロコシに代わつた。

か熱くなる。帰る際、みよさんは「たくさん、ありがと」とたどたどしい日本語で、あいさつした。



内村みよこさん（右端）の家族と弟のタオセさん（左端）。バダダ河畔のニッパハウスに住む